

第三章 鏡の中の顔

翌朝、ホームズは顔に大きなほほ笑みを浮かべ、自分のデスクに座っていた。

「これを聞いてほしい、ワトスン」と彼は、声を出して新聞を読みながら言った。

「『白い窓のある、高くて赤い家。3階。左手の2つ目の窓。日が暮れてから。G』これは、はっきりしたメッセージだ。朝食後にウォーレン夫人の家を訪ねて行こう」

「いい考えだ！」と私は言った。

私たちはウォーレン夫人の家に到着し、居間で彼女を待った。

彼女は突然、部屋の中に駆け込んで来て、「私は警察を呼ばねばなりません、ホームズさん、しかし私はまずあなたと話がしたかったのです。あの男は、この家を出ていかなければなりません！何かひどいことが今朝、私の夫に起こったのです！」と怒りながら言った。

「ウォーレンさんに何が起こったのですか？」とホームズは尋ねた。

「今朝、夫は7時前に仕事に出掛けました。夫が数歩道を歩いたところで突然、2人の男が夫の後ろに近づきました。彼らは、夫の頭にコートを覆いかぶせて、夫を辻馬車の中に押し込んだのです。彼らは1時間走り回って、それからドアを開け、ハムステッド・ヒースで夫を外に押し出しました。家に帰って来たとき、かわいそうに夫はとても怖がっていて、今は2階で眠っています」

「非常に興味深い」とホームズは言った。

「彼はその男たちを見ましたか？彼らが話すのを聞いたのでしょうか？」

「いいえ、夫には聞こえませんでした」とウォーレン夫人は言った。

「しかし2、3人の男たちがいたと、夫は思っています」

「それであなたはこれが下宿人と関係があると思っているのですか？」とホームズは尋ねた。

「もちろんです！」とウォーレン夫人は言った。

「私の夫にはこれまで、こんな問題は一度もありませんでした。私はあの下宿人にはこの家にいてほしくありません。お金が全てではありません！」

「ちょっと待ってください」とホームズは言った。

「あなたの下宿人は、ある種の危険な状態にいると私は思います。それらの男たちはおそらく、今朝あなたのドアの外で彼を待っていたのです。その時はまだ暗かったので、彼らはあなたのご主人が下宿人だと思ったのです。それが人違いだと気付くと、彼らはあなたのご主人を解放した」

「私は何をしなければならいのでしょうか？」とウォーレン夫人は尋ねた。

「あなたの下宿人を見たい」とホームズは言った。

「しかし、どうやって彼を見ることができますか？」とウォーレン夫人は尋ねた。

「誰も彼を見ることはできないのですよ」

「彼はドアを開けて、食事の載ったトレイを部屋に取り込まなければならない。ワトスンと私は隠れて、彼がそれをするのを見ることができる」

ウォーレンさんは少しの間考えて、「ええ、できますとも！彼の部屋の近くには小さな戸棚があるので、私は鏡を立て掛けることができます、そしてあなたたちがドアの後ろにいれば…」と

言った。

「素晴らしい考えです！」とホームズは言った。

「彼はいつ昼食を食べるのですか？」

「1時ごろです」

「よし」とホームズは言った。

「ワトスン博士と私が、1時前にあなたの家に伺います。それではまた、ウォーレン夫人」

12時半に、私たちはウォーレン夫人の家の外にいた。

ホームズは、反対側にある家の一つを指さした。

「見てくれ、ワトスン！」と彼は言った。

「『白い窓のある、高くて赤い家』だ。あれが、新聞のメッセージに載っていた家だよ。今や私たちは場所と秘密のコードを知っている。私たちの仕事は簡単だ！見てくれ、窓には『賃貸用』の看板がある。人の住んでいないアパートに違いないよ」

「うん、きっとそうだろう」と、私はその赤い家を見ながら言った。
ホームズがウォーレン夫人の家の呼び鈴を鳴らすと、彼女はドアを開けた。
「あなたがたのために全て準備はできています」と彼女は言った。
「どうぞおいでください、戸棚をお見せします」
「ありがとうございます、ウォーレン夫人」とホームズは言った。
ホームズと私はウォーレン夫人の後について、そっと2階へ行った。
戸棚は、隠れるにはとても良い場所だった。
ウォーレン夫人は、私たちが下宿人の部屋のドアを見ることができるような位置に鏡を置いた。
私たちは座って、待った。
すると下宿人が昼食のためにベルを鳴らすのが聞こえ、ウォーレン夫人がトレイを持って近寄った。
彼女はそれを閉ざされたドアの近くにある椅子の上に置いて、立ち去った。
彼女の重い足音が階段を下りていくのが聞こえ、私たちは鏡から目を離さなかった。
「下宿人はいつドアを開けるんだ？」と私はささやいた。
「おそらく、もうすぐだろう」とホームズはささやき返した。
すると突然、ドアを開ける鍵の音が聞こえた。
2本の細い手が素早く出てきて、椅子からトレイを取った。
しかし一瞬の後、その手はトレイを元の位置に戻した。
私は戸棚に映る開かれたドアを見ながら、美しくもおびえた顔を見た。
それから、下宿人のドアが素早く閉ざされて、鍵が回された。
全てがもう一度静かになり、私たちは1階へと戻った。
「私は今晚、もう一度戻って来ます」とホームズはウォーレン夫人に言った。
「私たちはベーカー街でこれをもっとよく話し合うことができると思うよ、ワトスン」